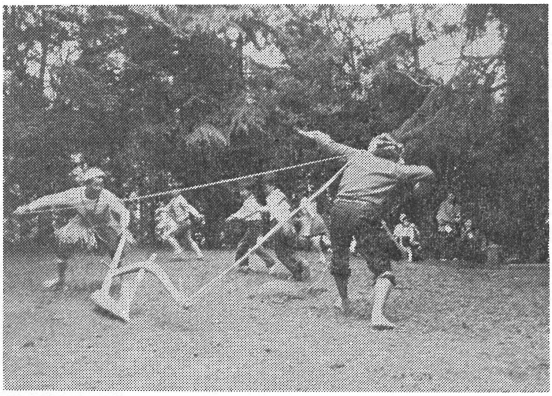
長谷のおん田（八日）

長谷の八坂神社（牛頭天王社）では、毎年五月八日（旧暦では四月八日



写 137　長谷のおん田

であった)ようか日の行事として「おん田(御田植え祭り)」が行われる。

この日各家々では、てんとう花を庭先に立て、編笠団子を作って供える。これも田の神を迎える行事であろう。

さて、当日の朝、村の当番の者が二人、村の山から苗に使うためのサカキの枝を伐り出し、一人で二束ずつ担いで帰る。

午後になると、この日役の者が、お供えの餅や牛の面などを担いで、小高い丘の上にある神社に登る。お供え、サカキ、牛の面を神前に供え、社殿の横にむしろを敷いて、直会(なおらい)の席を整える。

午後三時ごろに村人が大部分そろう。村からお神酒が供えられる。村の集会も兼ねるので、村人がある程度そろわないと祭りが始まらない。

祭儀は神官によって形の通り行われ、それが終わると直会になる。

直会のときには神酒を汲み交わしながら、村の協議が同時に行われる。

これと並行して、小学校一年から三年までの男女の中で、くじびきで男女六人ずつの早乙女(さおとめ)がきめられる。(以前は男子だけであった)

そのうち、女・子どもらの参詣者も次第にふえてくる。

大人たちが直会をしている間、子どもたちは神前の庭に棒切れで穴を掘る。これは「うと」にまねて穴を作るためである。長谷地区は耕土が深く、がまが発達しているので、随所にウグロ（モグラ）などがあけたうととよばれる穴がある。

やがて村人によるおん田の行事が始まる。直会の場でそれぞれの所役が定められる。腰に腰簑をつけ、煙草入れをさげ、木鍬を担いだ馬子役が神前の石段を駆けおりて、境内であぜはつりをまねて鍬を振り回す。子どもたちが「こっちにうとがある」、「そっちにもうとや」とまぜかえす。馬子役は「ああ、えらいえらい。今年のあぜは日和続きで堅うて、かとうて」等と観衆を笑わす。

写 138　早乙女役の田植え　（三村幸一提供）

次にからすきを負った馬子役が、牛の面をつけた牛役の男の追い縄を持って現われ、田を鋤くまねをする。途中で、うとに見立てた穴に足をとられる等の所作があり、何回か牛が観衆の中に暴れ回って、どっとわくところで荒起こしがすむ。

また馬子役が鍬をもって境内を回る。牛の荒起こしで、取り残されたところを耕す意味であろう。（昔は二番鋤きを行った）

次に馬鍬をつけた牛を、馬子役が出て境内を曳き回し、暴れる中でしろかきを終わる。

これで田植えに移るが、苗はサカキの束である。もっこに入れ

て天秤棒で担いできた馬子役が、サカキの束を境内に投げ出すと、早乙女役の子どもたちが、二本ずつ分けてもらい、地面に立てるしぐさをする。これが早稲の田植えであり、つづいて同様の所作を繰り返して晩稲の田植えとする。それが終わるとサカキの苗を集めて参詣者にくばる。

これが終われば神前に供えられた餅を、早乙女役の子どもたちをはじめ参詣者や村人にもくばって、おん田の行事は滞りなく終了する。

昔からおん田の日に雨が降るとその年は日照りが多く、晴天ならばその年は雨が多いと伝えている。